

物工同窓会だより

第 31 号

平成 28 年 10 月発行

2015 年度の物理工学科、物理工学専攻の近況報告

物理工学専攻 2015 年度 学科長・専攻長
長谷川 達生

2015 年度の物理工学科、物理工学専攻についてご報告いたします。
最初に人事異動から報告します。

2015 年 12 月 1 日付で、求幸年氏が工業力学講座の教授に昇任されました。2016 年 2 月 1 日付では、渡辺悠樹氏が工業力学講座の講師として着任されました。同 4 月 1 日付で、吉岡孝高氏が光量子科学研究センターの准教授として、藤井啓祐氏が小芦研究室の助教として着任されました。同 9 月 1 日付では、野村悠祐氏が今田研究室の助教に着任されました。また同 10 月 1 日付で、高橋陽太郎氏が量子相エレクトロニクス研究センターの准教授に、小塚裕介氏は量子相エレクトロニクス研究センターの講師にそれぞれ昇任されました。

一方、物工で活躍され、新たなステップを踏まれるべく転出された先生方も多数おられます。2015 年 7 月 31 日付で、石武特任助教が Lawrence Berkley National Laboratory の Postdoctoral Fellow として、また、丹治はるか助教が電気通信大学・准教授としてそれぞれ栄転されました。2016 年 1 月 31 日付で、三澤貴宏助教が物性研究所・特任研究員として、同 3 月 31 日付で、新谷大和特任助教が株式会社ニコンにそれぞれ転出されました。皆さん若手研究者として将来を嘱望されている方々です。益々のご活躍をお祈りしております。

今年も多くの方々が表彰の栄誉に輝いていらっしゃいます。2015 年 9 月には、川崎雅司教授が第 9 回応用物理学会フェロー表彰を授与されました。同 11 月には、沙川貴大准教授が第 30 回西宮湯川記念賞を受賞されました。2016 年 2 月には、井手上敏也助教が第 32 回井上研究奨励賞を受賞され、同 3 月には、市川昌和上席研究員が第 20 回日本表面科学学会賞を受賞され、また、香取秀俊教授が「光格子時計の先駆的研究」で第 16 回応用物理学会業績賞を受賞されました。同 4 月には、川崎雅司教授が平成 28 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学

技術賞を受賞され、千葉大地准教授が第 15 回船井学術賞(船井哲良特別賞)を受賞されました。同 7 月には、沙川貴大准教授がトムソン・ロイター社第 4 回リサーチフロントアワードを受賞されました。このように、物工では数々の名誉ある賞の受賞が続いております。

また学生も大変活躍しており、2015 年度には 5 名の学生が物理工学科優秀卒業論文賞を受賞し、5 名の学生が田中昭二賞（物理工学優秀修士論文賞）を受賞しました。また、藤代有絵子氏（十倉・藤岡研）は工学部長賞を、修士課程の安田憲司氏（十倉研）と博士課程の吉見龍太郎氏（十倉研）の両氏が工学系研究科長賞をそれぞれ受賞しました。

続いて今年度の学生の動向を報告します。2016 年 4 月には、駒場より 54 名が物工に進学しました。また修士課程には 56 名、博士課程には 19 名の進学者がありました。現在、修士課程学生の一部と、博士課程学生の多くは、文部科学省・博士課程教育リーディングプログラム・「統合物質科学リーダー養成プログラム(MERIT)」及び「フォトンサイエンス・リーディング大学院(ALPS)」による経済的支援を受けています。これ以外にも、工学系研究科によるリサーチアシスタント (SEUT-RA) 制度による支援があり、以前と比べ、博士課程学生は恵まれた経済的環境にあると言えます。

次に、学内の動きについても手短にご報告します。

2015 年度は五神新総長就任の初年度にあたり、新総長が打ち出す新しい大学改革に向けた胎動と、前総長による諸改革（学事暦刷新と 4 学期制への移行／推薦入試の導入／進学振分あらため進学選択制度への移行）の実施を図るための詰めの作業が交錯しました。学事暦については、日本の四季の移ろいと 4 月の年度開始という境界条件のなか、まとまった 4 つの学期と休暇をいかに配置するか議論が続きましたが、結果的に、全学で統一し、第 1（4~5 月）、第 2（6~7 月）、第 3（9 月中旬~11 月中旬）、第 4（11 月中旬~1 月中旬）学期とする制度が始まりました。推薦入試は、学力（2 次）試験を課さずに、学校推薦と面接試験だけで選抜する新しい制度として、2016 年度入試から導入されました（センター試験による基準は設けられています）。課題設定・解決力、コミュニケーション力、アピール力なども重視する新しい試みが、学内ひいては社会にどう定着していくか、今後を見守りたいと思います。2015 年 10 月には、東京大学の今後の行動指針をまとめた

「東京大学ビジョン 2020」

(http://www.u-tokyo.ac.jp/president/b01_vision2020_j.html)

が発出されました。「知の協創の世界拠点」としての使命を東京大学が担うべく、基本理念・ビジョンと行動計画が示されています。なかでも、博士課程教育リー

ディングプログラムを発展させる国際卓越大学院の創設や、若手研究者の雇用を充実させる研究者雇用制度の改革は、物工がすぐにも取り組むべき課題です。「知のプロフェッショナル」を育成する高等教育機関のモデルとして、物工には、総長が打ち出す諸改革へのコヒーレントな対応が求められています。

最後に、その他近況をお知らせします。進学生のご父母を6号館にお招きし、学科・専攻の紹介と研究室を実際にご覧頂く「ご父母のためのオープンキャンパス」が、例年7月に工学部／工学系研究科により催されています。普段は伺い知れない研究の現場を垣間見られるとたいへん好評で、毎年多くのご家族にご参加頂いております。2015年11月には、4号館の改修終了に伴い、(昔応物実験で使われていた)6号館4階南側のスペースが、物工と計数に戻ってきました。鳩貝さんは、今年古希(70歳)を迎えましたが益々お元気で、2号館1階の理工連携キャリア支援室に居をかまえ、物工生だけでなく、工学系や理学系の学生の進路指導にあたっておられます。鳩貝さんの同窓生ネットワークをいかに引き継いでいくかも、今後考えていくべき課題です。同窓生の皆様のお知恵を、是非お聞かせください。

同窓生の皆様には、物理工学科・物理工学専攻へのさらなるご支援を賜りますようお願いいたします。10月15日(土)のホームカミングデーには、ご家族もお誘い合わせのうえ、是非ご参加ください。

人と人のつながり

山田 範 秀

コニカミノルタ株式会社
物理工学科 昭和58年卒業

工学部6号館正面の階段、美しいと思いませんか？人と人のつながりの大切さを痛切に感じて生きて来た自分の原点がそこにあるような気がします……。

先日、今は雲の上の人になってしまった東大総長の五神先生に面談の機会を戴くことが出来た。会ってみるとちっとも雲上人ではなく昔ながらの五神先生だったので安心したが……。対談の中で最も印象深かったことの一つが、東京大学の改革・生き残りを目指すにあたり、良い学生を送り出して大学の役目はおしまいなのではなく、産官学全てに互る人的ネットワークは大学を介して繋がっているのだからそれを戦略的に活用するのがこれからの重要な課題だと、先生がお話されたことである。このお考えには本当に共感した。何故なら、東京大学の改革と言った大業ではないが、小生はこの人的ネットワークを大いに活用し、そして、人と人のつながりの大切さを痛感しながら自らの人生を歩んで来たからである。



木漏れ陽の工学部6号館正面

SPYSEE というサイトをご存じだろうか。誰かを検索するとその人と何らかの関係で繋がっている人々を知ることができ、そこからさらに繋がる人々を知れるサイトである。不的確な繋がりを示している場合も多々あり決してこのサイトの宣伝をしている訳ではないが、人はこうした繋がり、また、その相手からのさらなるネットワークを利用して生きているのだと真に思う。自分を調べてみると何故かあの UCSB の中村修二さんが真横に繋がっている。そこから名城大学の赤崎先生へと……。共著論文も共同特許もない中村さんが第一の繋がりというのは不可思議な気がするが、昔、国際会議などで何回もディナーを共にした仲、まあ良いか。

さて、小生こと山田範秀を多少ご存知の方は、外資系とか LED というイメージが強いと思われるが何故か今は純国産企業であるコニカミノルタにいる。五神総長にも、アレ、山田君、なんでコニカミノルタに居るの？と驚かれてしまったくらいである。昨年、産業界に出てから25年間居た外資系企業を辞め現職に移った。本稿が皆様のお目に触れるころには転職後一年と言ったところか？さらに現職ではこれまでずっとやって来た LED とは全く違うことをしている。安全運転など、人の安全

の支援に関わる新規事業を開拓、推進するのが小生のミッションである。

さて、前置きが少し長くなり過ぎたが、小生が大切さを痛感してきた「人と人のつながり」に主眼を置きながら、今に至るまでの我が人生をつらつらと振り返って物同窓会だよりへの寄稿とさせて戴きたいと思う。

もとを辿れば、理科一類から物理工学科に進み田中昭二先生の研究室で卒論を書かせて戴いた。もちろん田中先生が4年生の小僧っ子を直接指導する訳はなく、実質的な指導教官は応用化学科から移って来られたばかりの北澤宏一先生であったが。卒論のテーマはもちろん高温超伝導でありミュラーやベドノルツがノーベル賞を受賞する数年前であった。

田中研の新歓パーティを工学部6号館の大会議室で開催して戴いた。4年生は8人、そのうち私を含む7人もが喫煙者であった。いたずら好きな私は4年生の喫煙者に、全員で部屋の片端に並んで腰掛け脚を組み田中先生のご来場と同時にタバコに火を付けるのはどうか?と提案すると、このいたずら提案に皆賛同してくれて計画通り先生をお待ちした。果たして、田中先生がご入室、皆でシュポッと点火、先生一瞬ギョット驚かれたようではあった。が、さすが大物、すぐにいつも通りのダンディーな笑顔にもどり「バーカ、何やってんだ、お前ら」。これが田中先生との最初の出会いで有ったのだが、このいたずらのお陰かすぐに覚えて戴き、その後長期に亘り、田中先生、北澤先生には実にお世話になった。残念ながら数年前、お2人とも相次いで天国に旅立たれてしまったが・・・。田中先生、北澤先生には、殆ど何の恩返しも出来ずに申し訳ない気持ちしきりであるが、天国に行かれた田中先生のお別れ会の時に一人の卒業生代表としてスピーチをさせて戴けたこと、また、北澤先生の喜寿の祝賀会の時に祝賀講演をさせて戴けたのがせめてもの恩返しだと思っている。

北澤先生のご指導のお陰もあり大学院入試も通り、修士課程は物性研の三浦登先生の研究室でお世話になった。ところが父の経営していた会社が突然倒産してしまった。金欠となり兎に角日々の生活に困り果てた。当時物理工学科教務室におられた鳩貝さんに助けて戴き、教務室で会計ソフト作成のアルバイトをさせて貰った。それ程高い賃金ではなかったが、奨学金なども多少受けていたので何とか食い繋ぐことができ、お陰様で、修士課程も無事修了することができた。また、このソフトは工学部全体で使われる物に末は発展したと聞いている。嬉しい次第である。

鳩貝さんとの出会いは、理科一類から物理工学科に進学して間もない3年生の時に遡る。ある日、登校して6号館の玄関に入り掲示板を見ると、正確には覚えていないが「山田範秀、教務室へ出頭せよ。鳩貝勉」なる旨の呼び出しが張ってあるのではないか。もちろん、鳩貝さんとは殆ど面識がなかったので、どんな怖い人なのだろう、何か悪事をやらかしたっけ（法律に触れるような事は滅多にしないが、子供の頃から親や学校の先生を怒らせるようなことは数多くしてきている）、などとビ

クビクしながら教務室のドアを叩き「山田と申します。鳩貝さんはいらっしゃいますか？」と尋ねると、「君が山田君か」とどう見ても娑婆に暮らす真っ当な方には見えないお方からのお返事。「君は真面目に大学に来てないそうだな」というお叱りの言葉から始まっているいろいろ話をしたはずなのだが内容は全く覚えていない。あまりに鳩貝さんの醸し出す雰囲気インパクトの強さに押され、他の全ては記憶するに値しない小さな事にしか過ぎなくなってしまったのであろうか。

自らの名誉の為に言っておきたいが、自分は毎日、真面目に大学へ来てはいた。ただ、冒頭に述べた6号館正面の美しい、また、風情のある階段が大好きで授業に出ずに日がな一日、そこに座って本を読んでいることが多かったから、授業中の教室に居る時間は人より少なかったかもしれない。もちろん席を外して、というか階段を去って、授業にも出かけた。しかし授業が退屈で眠くなると（先生方、ごめんなさい）そこに戻って本を読み始めた。すると不思議と目が覚めた。

なににせよ、これが鳩貝さんとの出会いであるが、その後現在に至るまで感謝しきれない程お世話になっている。お酒、麻雀、ゴルフと言った遊興娯楽はもちろんのこと、仕事でも随分とご指導、ご助力戴いている。何かコネクションが必要だというときは、鳩貝さんに相談すれば必ず適切な方をご紹介戴けた。ドンピシャでなくともそこからまた繋がっていけばよい。これがまさに、大学を介して繋がっている産官学全てに互る人的ネットワークであろうか。ちなみに、遊興娯楽をご指南戴いたことも仕事では本当に役に立っている。人と人のつながりを確立するためにも、そして、相手の人柄を知り戦略を立てるためにも。

話は少し戻って、物理工学科教務室での会計ソフト作成アルバイトであるが、結構仕事量は多かった。自分も昼の物性研の研究室での研究や実験等の終了後、夕方ないしは夜からしか業務を開始できなかった事もあり、教務室で明け方まで仕事をしている事もしばしばであった。私と同年代または私よりご年配の方は覚えてらっしゃるだろうか？6号館には守衛室と言うか用務員室というか、畳があってお茶がいつも沸いている部屋があり、清水さん、今井さんという守衛さんがいらしゃった。お二人とも厳格な方であったが、特に清水さんは極めて厳しく私などはしょっちゅう叱りつけられていた。ところが・・・である。ある晩私が深夜作業をしている時にこの清水さんが覗きに來られた。また何かで叱られると思ったのだが、豈図らんや、「おい山田君腹空かないか？」と言ってカップラーメンを作って持ってきてくれたのである。夜食もろくに買えない貧乏さであったから涙がでるほど嬉しかった。大学を介する人的ネットワークとか大げさなものではないがこれも人と人のつながり、助け合う事によって人は生きているのだな、と今でも忘れられない良き思い出である。清水さんはその後何度も御馳走して下さった。今更であるが心より御礼申し上げたい。

さて、何とか食い繋いでいたものの、残念ながら博士課程に進む経済的（能力的？）余裕はなく就職をしなければと考えていた時に、計数工学科の豊田弘道先生・

藤村貞夫先生に助手として来ないかとお誘い戴いた。お誘い戴いたと言うより、断ることの不可能な命令の申し渡しのような雰囲気であったことを覚えている。「お前は社会に出るにはまだ早すぎる」というご判断だったのだろうか(笑)。何にせよ、同じ応物とは言え違うコースでの助手、不安はあったものの喜んで引き受けた。後で聞いたところによると、田中先生、鳩貝さんが助手を探していた豊田先生に「面白い元気な奴がいるぞ」と推薦して下さったのだそうだ。

助手に就任して間もなく、石川正俊先生が筑波の通産省工技院製品科学研究所から助教授として戻って来てられた。豊田先生、藤村先生、石川先生、大きく異なるが、どなたも「凄い」という言葉が一番あてはまる御三方を見ながら助手を数年務めるうちに、博士号を戴く事ができた。

他大学から講師・助教授のポジションに関するお誘いも来るようになり、どこの大学に行こうか？スキーができるから東北方面が良いかな、いや、やっぱ温かい九州方面が良いかな、など色々と思いを巡らせていたとき、田中先生から突然呼びだされた。アメリカのヒューレット・パッカード (HP) という会社が日本に研究所を作るから、お前そこに行け。と言ったお話し。大学にて一生を送るのだろうかと思いはじめていた矢先であったから兎に角びっくり。これはある意味危険な賭けだと思いはしたものの、「好きな研究ができるぞ！アメリカにも行けるぞ！」などの甘い言葉に誘われて結局躊躇することなく有難くその話を受けた。もう一つ、田中先生の「いざとなったら俺が面倒見てやる」のお一言も私の背中を強く押した。

HP 日本研究所の初代所長は東北大におられた「半導体の物理」という著書で有名な御子柴宣夫先生であったが、彼も田中先生の「甘い言葉」で勧誘されたのであらうと思う。という事で、自称、田中先生の子分の御子柴先生と田中先生の教え子である小生の田中先生つながりの二人でHP 日本研究所は始まった。

HP では海外勤務3年を含み10年ほど研究に従事し履歴書で1ページを埋め尽くせるくらい多岐に渡る研究に携わったが、特に力を入れたのが、LED や半導体レーザーの研究である。半導体には大きな装置、設備が必要である。ところがアメリカの本社からみれば日本研究所など海外にある小さなサテライト研究所であるから大きな設備をふんだんに導入させてはくれない。そこで、研究を進めるためには共同研究の道を取るしかないと考え、御子柴所長にお願いして、彼の人的ネットワークを大いに活用させて戴いた。御子柴所長のお知り合いを片っ端からご紹介戴き多くの方とお会いして共同研究の可能性を模索し、結局、名城大学の赤崎教授、天野先生、東大先端研の白木教授、東大物工の伊藤教授、上智大学の岸野教授、NTT 厚木研究開発センター、などなど、多くの大学の研究室や企業の研究所と共同研究を行った。共同研究までは至らずとも、有意義な学術的議論や情報を交わすようになった先生や企業の方々は数知れない。

御子柴所長の人的ネットワーク、そこから更に繋がるネットワークを活用して行った共同研究、議論、情報交換のお陰で研究においてまずまずの成果を収めること

ができ、1999年にHPがアジレント・テクノロジーという会社を分社化したのち、2000年にアジレント・テクノロジーの日本研究所長に任命された。

研究所長として会社では日米を股にかけ、学会では世界を舞台に活躍し、物理工学科が2年生向けに作った勧誘パンフレットに卒業生代表として小生の顔写真付きの寄稿もさせて貰ったりと、順風満帆の航海が始まったと思ったのだが、それも束の間、人生追い風の時もあれば向かい風の時もあるようで、2000年代初頭のアメリカでのITバブル経済の崩壊により研究所の閉鎖を余儀なくされてしまった。

必死に部下たちの再就職先を探した為、程なく全員それなりの行く先が見つかった。そのお陰か、当時の部下達の何人かとは未だに親交があるのは嬉しい。しかし、ふと気が付くと自分は一人ぼっち。時期は冬、寒風の中を首をすくめてトボトボとリクルート会社を訪ね歩きながら、さて自分はこれからどうしようと失意のどん底に落ち込んでいた矢先、HPからスピンアウトして独立していたルミレッズというLEDメーカーから、日本支社長になってくれないかとの誘いを受けた。ビジネスも経験できる良き機会と受け止め、2003年よりルミレッズ・ジャパン代表に就任しその後12年間LEDのビジネスを、LEDの普及とそれによる環境の向上をビジョンに遂行して来た。ルミレッズへ私を誘ってくれた中心的人物ももとHPで、彼は事業部の立場から私は研究所の立場から窒化物半導体LEDの事業化をHP内で共に目指し協力して来た男である。ルミレッズには、同様にHP時代からLEDの研究や開発において我がHP日本研究所のチームと共に切磋琢磨した友も多くいたから皆のサポートを得てすんなりとルミレッズ・ジャパン代表に就任できた訳である。HP時代に多くのつながりを事業部においても育てておいた努力に救われたのである。

ルミレッズ・ジャパンでの新職はこれまでの研究所の仕事とは異なり、ビジネスという自分にとっては全くの新天地であったが、ルミレッズ本社の製品開発部隊へのパイプも上で述べた様な理由で太く繋がっており、ビジネスを遂行するにおいて大変有効な武器となった。また、顧客の開拓などにおいても、協業においても、大学や高校を介する人的ネットワーク、また、それまでに育てて来た人と人のつながりは大いに役に立った。

例えば、ソニーが当時フラッグシップモデルとしていたQualiaというシリーズがあった。

液晶テレビのバックライトをこれまでの蛍光管からLEDにしたQualia005という液晶テレビを開発したいので協力して欲しいという話が、ルミレッズに移った翌年辺りに来た。ソニーのテレビ、大きな商談であることは間違いないので訪問してみると、先方の担当者が我々を「LEDさん」と呼ぶではないか。魚屋さんとか八百屋さんとかあまり響きが変わらない。開発プロジェクトの詳細を知りたいとお願いすると、何故その必要がある？LED屋さんは言われたLEDを作って持って来てくれれば良い、と言った対応。ルミレッズの既存製品では先方の求めるスペックを達成できそうにないのでルミレッズ側でもそれなりの新しいLEDの開発が必要で、パート

ナーとしてお互いにコミットして協業しなければ良いものなど作れる訳がない。しかし、とても協業とか言った雰囲気ではない。アメリカの本社の「俺は会社一短気だ」と自慢して止まないプロレスラーのような体格のCEOは怒り始めるし・・・命の危険すら感じる始末で、本社と顧客との間に挟まれて困り果てた。困った時の人的ネットワーク頼りという事で、誰か小生に繋がっていきそうな人がソニーの関係部署に居ないか調べてみるとやはり居た居た。実はLEDバックライトテレビの開発をソニーの中で推進してきたシニアVPが物理工学科の大先輩である久保田重夫さんであることを発見、さらに幸運なことにその直属の部下である部長さんが直接面識のある私の出身高校の先輩であることが分かった。さっそく、その高校の先輩を通して久保田さんにお会いして、状況をご説明、協業というスタンスでやる方向に同意して戴き、「LED屋さん」から「ルミレッズさん」に昇格できた。初めにLED屋さんと呼んだ担当の課長さんも態度を180度翻して、結果的に素晴らしい協業が走り、極めて短時間で製品化まで漕ぎ着けた。そうは言っても、所詮は違う会社、さらに、日本人とアメリカ人、色々な不一致や揉め事は後を絶たず、そうした時も有難い事に、久保田大先輩がなんとか治めて下さった。

一方、人的ネットワークが上手く活用できない場合は本当に手間を要した。ルミレッズを率いて暫くは液晶テレビや液晶ディスプレイのバックライトや自動車向け灯具が主な応用分野であったが、LEDの価格低下、効率向上に伴い、まもなくして一般照明への応用に乗り出した。もとは家電と言えばパナソニックだったことの影響か、一般照明メーカーは何故か大阪に多い。そこで、大阪の一般照明メーカーを顧客として開拓せんと、大阪通いが続いた。ところが、調子よく相手はしてくれるもののちっとも商談まで進まない。何とかコネクションを探そうと思うも、相手は大阪と言う地域のそれ程大きくない規模の会社であるので、東大や自らの高校の出身者など皆無である。という訳で、ソニーを開拓したようなスピードには及びもつかず、門戸を叩いてから商談まで辿り着くのに最低3年、場合によっては5年以上かかった。ビジネスには結局人間どうしの信頼関係が必須なわけで、その確立に多くの時や手間を費やさねばならなかったのである。

ビジネスと言ってもアプリケーション開発に関してはかなり技術的なことも担当した。一例としてLEDの蛍光体の効率と液晶用カラーフィルターの最適化などである。カラーフィルターと言えば、凸版印刷、大日本印刷などが主流の会社であるのでどちらかと協力体制を取りたいと思った。凸版印刷には、物理工学科の大先輩である終元先生がいらっしゃるではないか。早速、このつながりをフルに活用させて戴いた。面白いエピソードをご紹介したい。ある日、我々と先方のチームとで、研究協力をする、しないの打ち合わせを凸版印刷本社会議室で行っていた。その時点までは、終元先生が私の知り合いであることは伏せてあった、と言うか伝えるチャンスがなかったのだが、休憩時間に会議室から出た時に、受付の女性に、大学時代の後輩でその後も大変お世話になっている山田という者だが副社長の終元さん

は本日いらっしゃる？尋ねると、早速副社長室に連絡して下さった。「おお山田君か、今から行くわ」と仰って下さり「いえいえ、それには及びません」との遠慮にも関わらず、すぐに我々の会議室へ登場された。その時の先方の面々の「いったい何事」と吃驚仰天された顔は未だに覚えている。もちろん、研究協力は順調に進んだ。

さて、一昨年、上述のように親交のあった赤崎教授、天野教授、中村教授が高輝度青色 LED の開発でノーベル物理学賞を受賞された。実はこれが小生の人生の大きな転機となった。大変嬉しかった反面、何故か自分は LED から卒業すべき時が来たのだなと感じたのである。ルミレッズの新経営陣と小生の間と考え方のギャップが生じ始めていたことなども引き金に、人の生活や社会を良くする新しい事業を一生のうちにもう一度立ち上げてみたいと考え、ルミレッズを去る決心をし、気が変わらぬうちに辞職願を提出してしまった。

辞職願の提出後、真剣に新しい仕事を探し始めたのだが、田中先生門下の先輩方々を中心に多くの方々が親身になって相談に乗って下さった。もと日立の浅井さん、もと東芝の笠見さん、ザインの飯塚さん、野上さん、もと NTT の伊澤さんなどなど・・・赤崎先生もそのお一人で推薦状すらお書き下さった。本当に皆様に感謝している。勇気付けられ助けられ、結局、冒頭に記したように小生の思いを高く評価してくれたコニカミノルタに昨年秋より移っている。

コニカミノルタでは、さっそく、計数工学科の助手時代からのつながりを利用して戴き、計数工学科／情報理工学系研究科の石川正俊教授と共同研究を始めた。その研究は久々にやりがいのあるテーマであり、普通であれば研究者としての現役をとうに終えているはずのこの年齢になっても「チーム」の一員として積極的に楽しく研究に取り組んでいる。

以上、自分の人生を振り返ってみた。傍からは、小生が他人の力に頼り自分では何もせずに生きて来たように見えるかもしれない。しかし、そんなことは全く無く、死に物狂いで懸命に生きて来た。そうでなければ、誰も小生など助けてくれやしない。ただ、この寄稿でお伝えしたいのは、研究だろうが、開発だろうが、生産だろうが、営業だろうが一人で出来ることなど何も無い；自分自身と与えられた組織が活用すべき第一のリソースであるのは当然の事であるが、人と人のつながりも本当に必要なリソースであり、重要な財産なのだという事である。今後も、知己や人的ネットワークを益々開拓し、人と人のつながりを大切に維持し育てていくように努めていく所存である。

石川先生との共同研究もあり最近では工学部 6 号館に度々足を運んでいる。6 号館の正面玄関を登るたびに、学部学生の頃この美しい階段に座っていた自分を思い出す。